



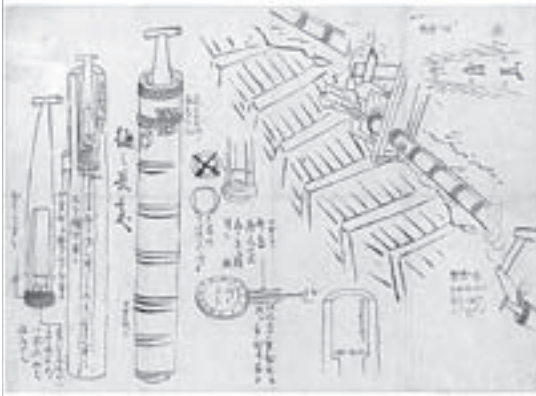
佐渡を世界遺産に

世界文化遺産登録に向けて

佐渡の金銀山史を彩る人々

○味方但馬守家重 (115623) (1623)

初代味方但馬は名を家重といい、先祖は織田信長の家臣村井長門守で、父善左衛門貞政が晩年播州(現兵庫県)の三方村に隠居したことから、姓を「三方」に改めたといわれています。家重はもと福島正則に仕えていましたが、武門を捨て、慶長9年(1604)、42歳のときに佐渡に渡り、山師として相川、西三川、新穂といった島内各地の鉱山の経営を行いました。佐渡以外にも、摂津(現兵庫県)の多田銀山や



▲スポン桶の見取り図

奥州(現岩手県)の南部銀山伊勢(現三重県)の銀山などを稼いでいたことが知られています。

家重は、銀山最大の稼ぎ場といわれた割間歩を再興したことで有名です。元和4年(1618)、湧水のため水没して操業が困難であった割間歩の稼業権を引き継いだ家重は、ヨーロッパの技術を取り入れたスポン桶を設置したり、長さ190間(約345m)も水貫きの坑道を掘るなどして、割間歩の排水に勤めました。

このように家重が経営した鉱山は大いに繁昌し、幕府に多額の上納金を納めたことから、家康にお目見えを許されたことと伝えられています。家重は佐渡



▲徳川家から拝領されたと伝わる茶碗



▲味方但馬家重肖像画

に渡った当初「三方貞重」と名乗っており、後に「味方家重」と名を改めますが、その改名についてこんな逸話が残っています。家康が「お前はどこの出身だ」と尋ね、「播州三方の出身、三方貞重」と答えたところ、「お前は良き味方だから、三方を改めて味方にせよ」、更に「家康の家の一字を与えらるから、貞重の重は残して、味方但馬守家重と名前を改めよ」といわれたそうです。また、徳川家から拝領されたと伝わる葵の御紋の入った熨斗目(武家の成人の礼服)や茶碗、扇子などの品が、味方家の菩提寺である相川中寺町の瑞仙寺に代々受け継がれ、平成16年(2004)に佐渡市に寄託されました。

家重は京都在住の元和9年(1623)4月、61歳で亡くなりました。彼は熱心な日蓮宗信者で、島内各地の日蓮宗寺院に寄進していたこともあり、遺骨は分骨され、新穂大野の根本寺に墓が築かれました。現在も境内には味方一族が寄進した建物や、味方但馬の銘が彫られた手水鉢などが



▲味方但馬の銘が彫られた根本寺の手水鉢

残っています。

家重の2代目以降は佐渡に土着し、明治2年(1869)、13代目まで山師として鉱山稼ぎに従事したといえます。その後、明治中期に14代目が相川を離れてしまいましたが、現在、17代目が新潟市に在任しており、味方但馬家の系譜は今も脈々と受け継がれています。

◆教育委員会 世界遺産・文化振興課

☎ 27 | 4 1 7 0

おわびと訂正

市報さど5月号に掲載しました「世界文化遺産登録に向けて—大久保長安」について誤りがありました。

2段8行目の「慶長8年(1693)」は「慶長8年(1603)」の間違いです。おわびして訂正します。

